

三木理史著 『水の都と都市交通——大阪の20世紀——』

田原啓祐

本書は、『近代日本の地域交通体系』（大明堂、一九九九年）、『地域交通体系と局地鉄道——その史的展開——』（日本経済評論社、二〇〇〇年）など鉄道史、地域交通史の分野で大きな研究業績をあげられた三木理史氏が、近年発表された明治期から第二次大戦前までの近畿地方、特に大阪の都市交通史に関する研究を踏まえて書き下ろしたもので、『近代日本交通史（全一五巻）』（老川慶喜・小風秀雅監修）の第九巻（第一回配本）として刊行された。

大阪はかつて「水の都」と呼ばれていたが、現在の大阪から「水の都」のイメージを思い描くことは難しい。実際、評者が初めて大阪を訪れたとき、大都市大阪から受け

たイメージは、網の目のように発達した鉄道、常に混雑した複雑な道路網、陸上をゆく人と車両の大きな流れであった。現在の大阪は、「陸の都」と化している。

「水の都」大阪は、なぜ、どのように「陸の都」へと変貌を遂げたのか。本書は、「水の都」という用語をキーワードとし、江戸時代から戦後にかけての大阪の歴史的発展と都市交通の関係を概観しながら、日本の都市交通の現状を考え直す手がかりを得ることを目的としたものである。

本書の構成は次の通りとなっている。

序章 見果てぬ夢

第一章 21世紀の「陸の都」

第二章 天下の台所は水の都

第三章 水の都の文明開化

第四章 水の都の近代

第五章 水の都に電車登場

第六章 膨脹する水の都

第七章 「陸化」する水の都

第八章 水の都の交通調整

第九章 水の都の記憶

序章では、かつて日本が満州国に当時の内地を凌ぐ社会資本を整備したが、それは内地で蓄積された最高の技術を満州で試すという思考に基づいていたことを指摘している。その一環として、奉天市地下鉄計画があり、それは第二次大戦前までの大阪市の都市交通に関する理念や技術の集大成であったことを取り上げている。

第一章では、二一世紀における大阪の都市交通の現状を、首都圏や中京圏と比較しながら概観している。第二章では、江戸時代に「天下の台所」と称された大坂の繁栄の姿とこの時代の沿岸海運、市中周辺の川船の発達を描き、当時の輸送システム全体が水運で完結していたことを取り

上げている。さらに、先史時代にさかのぼり、大阪地方の自然環境にも言及しながら近世大坂およびその交通の形成過程について論じている。

第三章から第八章では、明治維新から第二次大戦前までの大阪の都市交通の歴史を詳細に描き、かつての水の都が「陸の都」へと変貌する過程を明らかにしている。

第九章では、戦後の大阪の都市交通の源流が明治期から第二次大戦前までの都市交通の発展にあることを前提として、第二章から第八章で述べた内容を整理しながら、二〇世紀後半の大阪の都市交通を概観している。

本書の特徴は、「都市交通Ⅱ都市旅客交通とする既成概念」を批判する立場から、都市旅客交通だけでなく、都市貨物輸送を含めた都市域の交通全般を対象とした点にある。この視点に基づく記述により、巨大な人口、広域で複雑な市域である大都市大阪の都市交通の事情をより鮮明に浮き彫りにすることを可能にしている。例えば、明治初期の大阪では、水の都Ⅱ大阪の伝統、「荷物は船、人は徒歩」の原則が根強く残っており、大阪駅が設置された当時も、水運が主、鉄道が従の関係にあった(第三章)。舟が汽車を追い出すという明治初期の大阪の事情は、鉄道が近代化

の象徴とされ、その登場により近世以来の陸上交通や水運は衰退するという通俗的なイメージを払拭するものである。さらに著者は、現代日本の都市が抱える交通渋滞の問題にまで目を向けている。近年の都市交通対策が陸上旅客輸送の範疇でのみ語られることが多いが、かつての日本では常識であった都市輸送の分担関係に再度注目し、都市内の水陸間での客貨分離の意義の再評価を試みている（第九章）。

さらに本書は、著者自身が述べているように、都市交通史に関する概説的内容を含みつつ、全体的には大阪に関する特論になっている。随所に東京（江戸）や他の大都市の事例を取り上げ大阪との比較検討を試みたことにより大阪の特徴を浮き彫りにしている。また、多数の資料を用いることで読み応えのある内容となっている。私事ではあるが、大阪市内に住み、通勤のため都市近郊鉄道を利用する評者にとって、本書の内容は大変興味深く勉強になった。例えば、評者は通勤のためキタとミナミの私鉄と市営地下鉄の三つの路線を利用しているが、ミナミの私鉄と市営地下鉄の接続、市営地下鉄とキタの私鉄の相互乗入により、鉄道の乗り換えとそのための移動にそれほど不便を感じな

い。しかし、かつて大阪市が市内に敷設する電気軌道は原則として市が直接経営する「市営主義」の方針を堅持していたことで、郊外鉄道は、長い間見えない「城壁」があるかのように都心部への乗り入れが阻まれていた歴史があることを知ると、何気ない毎日の電車通勤の接続も有り難いことのように思えてくる。交通史、大阪の歴史に興味のある方はもちろん、多くの方に読まれることを期待したい。

(一) 『近代日本交通史』は、第一回配本の本書が刊行された後、出版中止となったが、このシリーズの一部は、その後日本経済評論社から刊行されている（老川慶喜・小風秀雅監修『近代日本の社会と交通（全一五巻）』）。

三木理史著『水の都と都市交通——大阪の20世紀——』（成山堂書店、二〇〇三年刊、A5版、二二二頁、本体二四〇〇円）

（たはら けいすけ・龍谷大学経済学部非常勤講師）